

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	向井 秀文
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
考え続ける義務感と反復思考の役割に注目した診断横断的なメタ認知モデルの構築			
論文審査担当者			
主査	准教授	杉浦 義典	
審査委員	教授	岩永 誠	
審査委員	教授	関矢 寛史	
審査委員	教授	坂田 桐子	
〔論文審査の要旨〕			
<p>心理的問題にはうつ病や不安症など多くの種類があるが、それらに共通する予測要因に注目する診断横断的アプローチはより効率的な治療につながる可能性がある。本論文は全六章からなり、ネガティブな考えが繰り返され持続する反復思考と、それを増強させる考え続ける義務感を共通要因とする仮説を調査データにより実証したうえで、考え続ける義務感を低減させる治療を実施し効果を検証している。</p> <p>第一章は序論であり、文献研究をもとに、診断横断的要因として反復思考に着目することを述べた。さらに、反復思考を増悪させる要因を明らかにするために、考え続ける義務感というメタ認知的信念（自分の認知過程をモニターして統制するメカニズム）を取り上げることが述べた。</p> <p>第二章の研究1は、予備的な研究である。考え続ける義務感と類似したポジティブなメタ認知的信念というものが従来からあり、心配が有用だという考えを反映し、心配の頻度を増やすと考えられてきたが、症状に対する予測力が低い。その理由として、ポジティブなメタ認知的信念には、適応的な側面も混在しているという仮説をたてて大学生118名を対象に調査を行った。その結果、一定の個人特性をもつ人の場合にポジティブなメタ認知的信念の適応的な効果がみられた。この結果から、考え続ける義務感を導入する意義を示唆した。</p> <p>第三章の研究2では、考え続ける義務感が反復思考を強めることを通じて、複数の心理的症状を予測することを、大学生145名を対象とした調査データで示した。症状に対する予測力が強いことが知られているネガティブなメタ認知的信念（反復思考を有害なものとする傾向）と比較しても、考え続ける義務感は遜色のない説明力を示した。</p> <p>第四章の研究3では、考え続ける義務感とネガティブなメタ認知的信念の双方を取り入れて、大学生165名を対象とした縦断調査を行った結果、考え続ける義務感が、ネガティブなメタ認知的信念と反復思考を強めることを通じて、多様な心理的問題を強めることを示した。</p> <p>第五章の研究4では、メタ認知療法という方法を、上記の知見をもとに考え続ける義務感の低減を中核に改編し、複数の心理的問題に悩む大学生34名を対象として実施した。その結果、比較的短期間で多くの心理的問題の症状が低減した（著者は臨床心理士の資格を保有し、心理</p>			

療法の十分な技能がある)。

第六章は、総合考察である。メタ認知に着目した理論や治療を、診断横断的に応用した研究はこれまでない。本研究では、反復思考と考え続ける義務感が診断横断的な予測力をもつことを示した。また、考え続ける義務感が反復思考を高めることを通じて様々な心理的症状を高めることを示したことによって、治療のターゲットも明らかにできた。さらに、調査研究に加えて、実際に考え続ける義務感を低減する治療を実施することで、仮説を因果関係にまで踏み込んで実証したとともに、臨床応用の可能性も示された。

本研究は、様々な心理的問題が悪化するメカニズムとその治療法を、考え続ける義務感と反復思考を組み合わせると統一的に説明するという独創的かつ大胆な着想に基づいたチャレンジに富んだ研究である。その過程では、質問紙データを高度な統計手法で解析するなど、研究の方法論は着実なものである。さらに、調査研究で実証されたモデルに基づいた治療の効果を示すなど、実践的な示唆にも富んでいる。このように、理論と社会の双方にとっての意義を総合すると、学術的貢献度の高い論文といえる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500 字以内とする。